

わくわく木工教室

木と遊び、木に親しんでもらおう——と、小学生を対象に2012年の春から始めた「木工教室」が、その年の秋まで12回も回を重ねたのは、次の開催を早く望むリクエストが多

く寄せられたからです。上北郡東北町の製材所が主催し、同町の工務店が協賛して実現したもので、予想外の反響を喜ぶ製材所の社長は、「木を使ったものづくりをきっかけにして、子供たちの心に、地元の方に育つ樹木への「関心の芽」が育つてくれれば」と今後の開催に意欲をみせています。

また同秋に、自然との触れ合いを目的に大鰐町の山里で行われた栗拾いやブルーの収穫、木の枝などを使った創作

木工などのイベントで、子供たちがアンケートに答えた「一番楽しかったこと」は「自然の物での木工品作り」、「今度してみたいこと」は「もっと大きな木工品作り」という結果が出たそうです。

地味ながらも子供たちを惹き付ける「木に親しむ」取り組みのほんの一例をご紹介します。

木と遊び、木に親しむ 県産材知るきっかけに

館内に、カナツツの音が響いていました。何人もが一斉に釘を打ち付けている音です。東北町の小河原湖交流センター「宝湖館」で「わくわく木工教室」が開かれています。

カナツツの音は、宝湖館の2階から響いてきます。階段を上

がっていくと、入口に「わくわく木工教室」の看板が立つ小ホールで、子供たちが板に釘を打ち付けているところでした。親子連れと、お爺さんやお婆さんも含め参加者は約30人。第1回目は「蓋付きの箱」作りをするのだそうです。

この木工教室を主催したのは、東北町のウッドランドなかきち(尙中吉製材所)。中野晃治社長が木工教室を開いたきっかけをこう話します。

「今の時代は、子供の頃に遊ぶおもちゃといえはプラスチック製で、通った小学校も中学校の校舎も鉄筋コンクリートだから、成長過程に「木に親しむ」体験

がないわけですよ。ですから、大人になつてさあ家を建てようというときに、県産材の家を、と呼びかけても、「県産材」という選択肢がないわけです。木工教室で木に親しんだからとい



1年間に12回も開催された「わくわく木工教室」

て、皆が皆、木の家を建てるわけではありませんけれど、中には建てる人もあるはずですよ」

その意見に賛同する仕事仲間（㈱織笠工務店の協力を得て、開催の運びとなったのです。

板に片足を乗せてノコギリを挽く男の子のそばに寄って、講師の織笠拓重社長が手ほどきします。こうした方が釘を打ちやすいと、カナヅチの持ち方についても教えます。子供たちはすぐに要領を飲み込みます。

ノコギリで板を切るときの、柔らかすぎず堅すぎずオガ屑をかき出しながら刃が食い込んでいくあの感触。立ち上がる木の匂い。カナヅチで打つ釘が木に刺さる、あの柔らかすぎぬ堅すぎぬ心地よさ。子供たちも、大人たちも、楽しそうに工作に打ち込んでいます。

「すつこく喜ぶんですよ。生き生きしていましたね。木工教室がこんなに受けるとは思いませんでした。今どきの子供たちはゲームにばかり夢中だと思って

いたんですが、工作の楽しさは昔も今も変わらないということですかね。もう次はいつやるの、って聞かれましたよ」

織笠社長が笑ってそう話します。

「やめられなくなった」

夏に開かれた第7回目の模様は地元紙で紹介されました。

『県産木材で木工作品を作る』ことよって、木に触れる喜び、作る楽しさを体験してもらおうと、東北町で「わくわく木工教室」が開かれた。町内外から参加した親子連れらが県産スギの感触を確かめながら木のいす作りに挑戦した。最初にノコギリを使って、1本のスギ材を、いすの足や座る部分などに一定の長さに切り分け、切った部分を間違わないように組み立てながら、木のいすを完成させた。八戸市から孫2人と参加した参加者の1人は、「今回で4回目の参加。手作りの楽し

さを知って、やめられなくなると話していた』

上々の反響に織笠社長は、「次は子供たちを山へ連れて行くこうと考えています。山に生えているスギの木を見せてあげたいんですよ。木工教室で箱作りやいす作りに使ったスギは、この木を伐り倒して製材所に運んで板にしたものだということを知ってほしいんです。実感したことって、大人になっても忘れませんからね」

そう話す表情に大工職人の誇りが輝いていました。



おおわに自然村で開催されたイベントに参加した子供たち(上)と出来上がった作品(下)

### おおわに自然村

「もっと大きな木工品を」アンケートで「一番の人気

大鰐町長峰駒木沢の「おおわに自然村」(㈱エコ・ネットが運営)でも、2012年10月に木工体験が開かれました。山の自然と触れ合うイベントの「秋の森」で行われたもので、参加した親子連れなど合わせて30人が、拾い集めたドングリやクギの板をキャンバスにして思い



子供たちに大人気の木の枝に吊るしたロープを登る「ツリーイング」

思いにトンボやカブトムシなどの作品づくりを楽しみました。「おおわに自然村」は、大鰐町から十和田湖へ至る東ルート of 国道454号沿いにあります。山林に囲まれた広さ7ヘクタールの敷地内には畑や果樹園、養豚場などが整備され、生ゴミから製造した堆肥や飼料で野菜や豚を育てる循環型農業が学べる施設となっています。耕作放棄地だった観光リンゴ園を、6年がかりで生まれ変わらせたのは(株)エコ・ネットの

三浦浩社長です。食料がゴミとして捨てられている現実に疑問を抱き、銀行員から転身して起業した「実行の人」です。

「親しんでから、知る、のだと思うのです。森にどんな木が生えているか、森に入ってそれらの木と親しんでこそ木の名前も覚えるし、木によって形が違うことなどが生きた知識として身につくのだと思うんです。豚もいる、ヤギもいる、山菜もあればイワナもホタルもいる自然豊かなここで遊んでいるうち

に、何か大事なものが子供たちの心に宿ってくれば」

三浦さんはそう話します。

### ランタンで「星空への道」

「秋の森」の前の夏休みには、自然村で「星空探検」が開かれました。とつぷりと日が暮れた山から夜空に輝き出す星々を観察してもらおうという趣向でした。この中でも、木工体験が行われ、電動ドリルで穴をあけてある県産のスギ板に釘を打ち付けてランタンを作りました。中にロウソクを点すと、丸い穴が星となって輝くというしくみです。子供たちはカナヅチで釘を打って組み立てました。それを、夜になってから、星空を観察に行く道端に誘導灯として並べて灯したのです。素敵な「星空への道」の演出に子供たちは大喜びでした。

大きな木の枝に吊るしたロープを登っていく、春に開催された「ツリーイング」も人気

がありました。現代版木登りです。ロープの輪にかけた片足を、下に踏めば体が上に上がるのですが、なかなか理屈どおりにはいかなくて、腰が下に落ちてしまうから、足を下に踏んだつもりが前に突き出てしまうのです。それでも子供とは覚えが早いもので、いつのまにかコツをつかんですると頭上の枝の方へ上がっていきます。先に乗った女の子が、「上がってくるまでここで待ってるからねエ。上がってきたら、いっしょに降りよう」と、遅れている男の子に声援を送る心優しさに親たちも笑みを浮かべていました。

「2012年は春、夏、秋と3回イベントを行いました。3回目『秋の森』の際に子供たちにアンケート調査しましたら、『二番楽しかったこと』『木工品作り』、『今度してみたいこと』では『もっと大きな木工品作り』が一番多かったです」と三浦社長。

時代を問わず、木工体験の人



気は根強いようです。三浦社長は、子供たちの要望を次からのイベントに反映させていくそうです。

### 森林組合フェア

#### 力自慢が丸太の早切り 「お父さん、がんばれ」

弘前地方森林組合は2012年10月、弘前市境関の同組



木を切るスピードを競う「木こり選手権」

合敷地内で「森林組合フェア」を開催しました。2012年は国連の定めた国際協同組合年（協同組合の認知度向上などが目的）で、その記念行事として、木に親しみ、森林組合が担っている山の整備の仕事にも理解をいただこう、と開いたものです。訪れた市民たちは「木こり（丸太切り）選手権」や、ドンダリやマツカサなどを使った創作木工などを楽しみました。

「用意、始めっ！」  
その合図で、2人の参加者が丸太にあてていたノコギリを挽き出しました。丸太に片足を乗せ、昔の木こりが使っていた大きな「窓鋸」を力任せに動かす男性。刃と刃の間が空いた窓からノコクスが掻き出されま

広がりました。懸命にノコを挽く若い男性のそばから、女の子が、「お父さん、がんばれー」と声援を送ります。窓鋸の方が勝ったり、腰鋸が勝ったり、次々と男性陣が挑戦していました。

#### 手入れた森は明るい

テントの内側には、県産スギの端材や支柱用丸太、コースターなどの販売コーナーが設けられました。エンジュのコースターを手にとった婦人が、「このエンジュって、どういう木なんですか」と訊ねると、組合員がテントの外を指差して、「そこに立っている木ですよ」

その木に近づいてみると、枝の根元を切り落とした楕円形の切り口が付いています。コースターをそこにあてがってみると、ぴたりと重なりました。「これがエンジュの木なの」  
夫人はつぶやくように言っています。枝が広がる梢を見上げていました。

テント内には、森林組合の仕事の内容を紹介するパネルも掲げられていました。

『山は人が手入れしないと荒れる。伸び放題の枝が陽射しを塞いで森は暗くなる。次世代を担う稚樹、幼樹の生長を妨げる。手入れが、枝打ちであり間伐である。手入れの行き届いた森は明るい。健康な森から染み出る養分豊かな水が川に運ばれて海の魚を育てる。山は木材の生産の場ということだけではなく、実は治山・治水や、かん養といたったその地域の環境保全に大きな役割を持っていると再認識されたのは近年のことである。手を入れる仕事をしているのが森林組合である』

日常生活からは離れていて普段はあまり意識されない「山」を仕事場として働く森林組合の担う役割が、読む人に伝わってきます。

弘前森林組合では、今後も何回かは継続してフェアを開催する予定だそうです。

## 木の段ボール

### 青森県生まれの新素材 木が波形描く段ボール

一方、県産材の需要増につなげようと、木を使った新素材の「木製段ボール」を開発した人がいます。(株)今井産業の今井公文社長です。軽くて、強くて、熱を伝えにくい、などの特徴を持つ『e・Wood』（イー・ウッド）。すでに今井産業モクテック工業が製造開始している『e・Wood』を利用した新商品



多方面から注目されている木の段ボール『e-Wood』

が、これから全国でお目見えすることになりそうです。

開発したきっかけは10年ほど前、今井社長が上京した折りに目にした、段ボールを利用した収納ケースでした。それまで荷物を包むだけに使われていた紙の段ボールで、箱を作ったことに驚いたと言います。そのとき、「木」の段ボールを作れば、伐採されたリンゴの木や廃材などが地域資源として有効利用されることにもなる——その夢を胸に、試作に取り掛かったのが3年前です。(株)21あおもり産業技術総合支援センターや林業研究所木材加工部、地元の短大などの協力を得ました。

実験には、幹の繊維質が多方向に広がり割れにくい性質を持つブナ、カバなどの県産の広葉樹を中、心に使用し、曲げっぱをヒントに試行錯誤しましたが、目指す「波形」になかなか辿り着けませんでした。そこで、金型で実績のある秋田県の

鉄工所に相談を持ちかけました。以来、毎日のようにメールでやりとりし、秋田から社長が訪ねてきたり、今井社長が秋田へ出かけたりが続き、ついに1号となる製造機械が完成しました。厚さ0.5ミリの薄板が高さ6ミリの波形になって機械から押し出されてきたときには嬉し涙がこぼれたそうです。

### 軽いスノーボード用に

木製段ボール『e・Wood』は、2012年11月に東京ビックサイトで開催された『産業交流展2012』に出展されました。売りは、100%リサイクル可能な木製エコ素材“。廃材を活用しているため低コストで、従来の木製品の3分の1の軽さ。波形が空気層をつくり出すため熱や音、電気などを伝えにくい——という「木の段ボール」ならではの特徴が関心を集めました。会場のブースで3日間応じた今井社長

はこう振り返ります。

「さすが東京で、全国から来られたいろんな方々が立ち寄られました。が、珍しかったのは、養蜂家でした。蜂の巣に使いたいというのです。今まで紙製の強化段ボールで蜂の巣を作っていたのですが、雨がずっと壊れてしまう。それで、何か良い素材はないかと探していたんだそうです。こちらでは思い及ばない要望があるものですね」

地元青森県のスキーマーカー(平内町)からは、「軽さ」を生かしたスノーボードの素材として検討したい、という引き合いがすでに寄せられているそうです。また、電飾看板を製造する長野市の大手メーカーがその系列会社の看板の素材として採用するなどの動きが出てきています。

青森県生まれの『e・Wood』を活用して今後どんな商品が生み出されるのか、生みの親の今井社長と共に楽しみを共有したいものです。

# こんな所にも県産材が使われています



タモのテレビボード

「県産材の家」というと、どんなイメージが浮かびますか？ 土台や柱、梁など主要な構造体にヒバやスギなどの県産材が使われた家。あるいは、外壁が板張りや廊下やリビングなどの床も板で、吹き抜けに梁が現わしになっっている家……そんなイメージが強いのではないのでしょうか。どちらかというと「硬い」ですよ。もっと身近に、例えば、木の小枝を活かしたカーテンフックとか、スギの角材でこしらえた木の花瓶とか、生活空間にちょっとした彩りを添える小物にも県産材は使われているのです。

「青森県産材でエコな家づくり」の取材を通して撮影した写真の中から見つけた、「こんな所にも…」を「切り抜いて」みました。



スギの木目を浮き立たせた木の花瓶



リビングに面する土間に備え付けられたスギの飾り棚



岩木山をかたどったヒバ製建具







ブナコの照明器具



ヒバの照明器具



組子細工の職人が製作した  
精緻なヒバの照明器具



玄関に備え付けられたトチノキ製の腰掛け



スギの一枚板を利用した玄関の式台



小枝を利用したカーテンフック



作り付けの洗面化粧台



厚さが10センチもある  
ヒバのディスクカウンター



施主自らスギ板で  
製作した  
郵便ポスト



長さが2メートル70センチもある  
ヒバのディスクカウンター



施主自ら図面を引いた作り付けの  
テレビボード



自転車も置ける水に強いクリの板土間



同じスギ板でもシェイク葺きにすると  
外観に違った趣を添える



木製ダンボール「e-Wood」と  
リンゴの木を組み合わせた照明器具



車のキーなどを置いておく小物棚



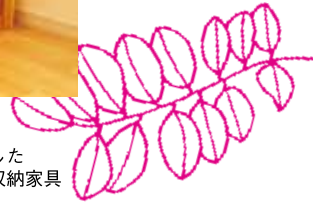
物入れ付きベンチ



納戸の棚



スギの木目を生かした  
手づくりの台所の収納家具



カラマツの塀



アカマツやスギなど5種類の県産材の  
木レンガを貼ったウェーブを描く壁面  
(八戸ポータルミュージアム『はっち』)